

10代の母という生き方④

大川 聡子

★まえがき

前回の連載では国内の文献検討を通して、若年母親には、経済的問題、学業の中断、家族の問題、そして若年で子どもを持つことによるスティグマの付与等、多くの課題があることをお示ししました。しかし現状において、若年母親に対しては「予防」に向けた対策のみが行われており、出産した母親への支援は乏しい状況にあります。そこで今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析したいと思います。

★研究背景

10代で妊娠した女性のうち、約6割と半数以上が人工妊娠中絶を選択し、出産を選択するのは約4割です（マガジン11号）。出産した母親に対しては様々な問題が指摘されており、若年で妊娠した多くの女性は中絶を選択しています。こうした中、若年母親はどのように出産を決意したのでしょうか。さらに、これまでの若年母親の研究の多くは、出産したことによる社会的問題を主眼としています。このため、出産前の社会的特徴についての調査はなされていません。今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が主体的に出産を選択していく過程と周囲の関わりについて明らかにし、その内容から、若年母親の社会的特徴に

ついて考察します。

★対象者の概要とインタビュー方法

研究対象は、既婚・未婚を問わず10代で出産して子どもが乳幼児である方としました。対象者は筆者の友人からの紹介や、インターネット上での協力依頼、また2市町村に協力依頼を行ないました。

面接が可能であった方10名に対して、半構成的面接を行いました。母親の年齢は14歳から22歳であり、平均は19.3歳でした。出産時の年齢は13歳から20歳であり、平均は17.3歳でした。また、夫の現在の年齢は17歳から32歳であり、平均は22.8歳でした。なお今回、Lさんが出産時に誕生日を過ぎ20歳になっていましたが、妊娠時は10代であり、10代で出産した母親と共通の要素が見られ、実質的な影響はないと考えデータに含めました。

内容は家族構成、学生時代の思い出、夫と交際したきっかけ、避妊の有無、出産を決意した過程、出産時の状況、母親になって変化したこと、周囲の関わり、育児の不安、社会サービスについて等です。面接することができなかつた方2名については、Eメールにてデータを収集しました。データについては、対象者のホームページに書かれていた内容についても、本人から同意を得られたため、データとして用いました。また2市町村の対象者においては、担当職員から受けた申し送りについてもデータに

含めています。

面接は200*年5月から9月にかけて行いました。インタビューに応じた12名のうち、夫が同席されたのは2名、夫の母親が同席された方、本人の妹が同席された方がそれぞれ1名ずつでした。また、紹介者が同席された方が4名、市職員が同席された方が1名でした。全ての対象者について録音の可否を尋ねましたが、お1人は録音を拒否されたため、インタビュー中に記録した文章を基にインタビュー記録を作成しています。

同席者が多かった理由として、1つ目はケースを紹介した紹介者に会いたいという母親側からの希望があり、紹介者と共にインタビューを行った事、2つ目に市職員が同席した母親については、職員の同席を前提として母親を紹介していただいた事があります。3つ目に、夫や夫の母親など家族が同席したケースについては、面接当日夫や夫の母親も面接体制を整えており、席を外していただくことで、インタビューに答えていただくための信頼関係が築けなくなることを危惧し、面接にそのまま同席していただきました。母親の一人は「(筆者が)どのような人か分からなかったので、旦那についてきてもらった」と語っています。こうした同席者が多いことは、同席者の意向に左右され本人の率直な思いが引き出せないことも考えられ、インタビューの方法論としては正確なものではないでしょう。しかし、同席者との相互作用により、若年母親の生育歴や家族関係などを詳細に話していただくことが可能となったことも事実です。

面接所要時間は一人あたり40分から151

分でした。面接場所は対象者の母校の保健室や対象者の自宅の近所の喫茶店、対象者の自宅等です。

分析方法は質的記述的研究とし、インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリ別に類型化しました。

対象者については、対象者の出産年齢順に事例1からA、その後B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、Lとし、Cのみ夫の母が同席したため、Cの夫の母をCMとしました。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリの整合性については、第3者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、加筆修正をしています。

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しています。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮しました。

★インタビュー結果

分析した結果、1.若年母親の出産前の社会的特徴、2.生きづらさの自覚、3.行き渡らない支援、4.母親になるための努力、の4つのカテゴリが導き出されました。抽出された内容をカテゴリ別に記します。以下、サブカテゴリを【 】、コードを《 》または〈 〉で示します。

1. 若年母親の出産前の社会的特徴

(1) 【出生から妊娠までの経過】

① 《妊娠前の社会的特徴》

〈家族との葛藤と思慕〉

若年母親の中には、両親の離婚あるいは別居に伴い施設で育った人や、里親の元で育った人もいました。家族のしつけが厳しかったり、母親から暴力的なしつけ、虐待を受けてきた人もいます。その一方で、良好な関係を築いていた家族も複数あります。

Fさんは、小学校3年生で両親が離婚しました。とても辛い経験をしたために、嫌だったと言うことしか覚えていないと言います。その後児童養護施設から児童自立支援施設に入所したため、父親と同居していた期間はとても短いものでした。このため、父親とは親子という雰囲気ではなく、今でも敬語を使って話す間柄だそうです。離別期間が長かったために、実の父親にも娘として甘えることが出来ないといった、複雑な思いがうかがえました。

Fさん お父さんね、Fとお父さんね、F施設入ったりとか、関係微妙じゃなか。それでお父さん女の人つくってるじゃなか。じゃけ、お互いそういう、親子っていう雰囲気じゃなくてね、お互い遠慮感がすごがあるけんね。お父さん、F意識しとるけんね、あんまりしゃべらん。Fも敬語でしゃべる。

〈短い修学年数〉

対象者の学歴は中学在学中、中学卒業、高校中退、高校卒業、小学校・中学校から施設入所など様々でした。今回の調査対象者に、大学に入学された方はいませんでした。

彼女達の学生時代の過ごし方も様々です。楽しかった思い出を語る人が多かったのですが、小学生時代にいじめにあっていたり、小・中学校で家庭内の問題や暴走行為などで施設に入所していた人もいました。

Dさんは中学校に通ったのは1年だけで、その後は鑑別所、矯正施設、少年院を転々としています。こうした経験を「自分にはいい経験やった」ととらえています。

Dさん まあ、世間からしたら恥ずかしいけど、全然自分にはいい経験やから言うけど、中学校は1年生まで入ったけど、中学校1年生までなんです、行ってんのは。なんでか言うたら、まず1回目、いろいろ悪いことして(矯正施設から)鑑別所入ってたんですよ。

筆者 その時の悪いことってどういう？

Dさん 暴走とかじゃない？

〈進路に向き合えない家族〉

インタビューした母親の中には、高校を退学している人が複数いました。高校退学の理由にあたっては、専門的な勉強をしたかったのに、親に言われるまま普通科に進学した等、自分の希望する進路を選択できなかったことが原因で中退に至る人が目立ちました。そこから、家族間の葛藤も読みとれます。

筆者 高校の時、辞めるにしろ何にしろお母さんにけっこう言われたりとか

Jさん 言われた。辞めるな辞めるなって言われた。もともと専門学校行きたかったから一、それで、反対されて無理やり入ったって感じだから、余計にとくに辞めたいって。

Eさんは、中学生の時から休みがちであり、高校進学にも関心が持てなかったと言います。しかし、親が家業で忙しく相談できず、何となく「周りに流されて」高校に進学したそうです。高校に入学はしたものの、校則違反により高校1年の1学期に退学することになります。Eさんは、(中)学校に行かなかったことを「できちゃった結婚の代表的なパターン」であると認識していました。

Eさん できちゃった結婚の一番代表的なパターンやと思うんですけど、学校には行ってない。中学校はろくに、3年生くらいから全然行ってない。で、高校一応入ったけど、その入ったのもね、みんなが高校入るって言うと思ったのに、うちは別に入りたいとも入りたくないとも分からなかったのに、親に相談した時も、親が、ちょっと引っ越しして、店経営でしたんですよ。それでちょっと忙しかった時期やから、受験のことで相談っていうのが一切できへんくて。自分がどうしたいんかも分からんまんま、周りに流されて一人だけ就職するとかがイヤやからっていうので、高校決めたみたいな感じやった。まあ案の定、辞めて、退学で。はは(笑)。

〈不安定な就労〉

若年母親は学校卒業もしくは中退後、勤務経験のある人が多いです。その職種は飲食業、衣料品店員、コンビニエンスストア店員、パチンコ店員、子ども服販売員、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、派遣社員、自宅での内職等です。出産後に全員が退職されています。

Dさんは、妊娠中に色々な内職をしてい

ましたが、内職で収入を得るのは困難だったと言います。現在は乳児の子どもに細かい道具が散らかされることを恐れ、内職をすることもできません。

筆者 内職とかって、お金になりますかね？

Dさん 全然。もう、ほとんどただ働き状態。3000個くらいやっても、5000円いかないね。1円10銭とかそんなかな。

② 《若年母親が語る夫の社会的特徴》

〈母子を養うことができる夫〉

若年母親の夫は、母親と出会った時には中学や高校を卒業し、働いていた人が多いです。職種は内装業、左官業、とび職、建設業、公設市場勤務、パチンコ店店員、荷物運搬業、家業手伝い、アルバイトなどでした。

〈身近な場やツールでの出会い〉

夫と知り合った場合は、中学、高校、妹や弟の紹介、職場・バイト先等でした。また、共通の場はなくとも、道で声をかけられたり、出会いを目的としたインターネットサイト等を通じて知り合っている人もいました。交際から入籍までの期間は1年未満の人が多いです。

③ 《妊娠した理由》

〈結婚するための妊娠〉

交際が進む過程でお互いに結婚したいと思っても、若過ぎる等の理由で親に反対されると感じ、親を説得するため、自立するために計画的に妊娠した人もいました。彼女達は、結婚願望がとても強かったと言い

ます。

Hさんは当時「何もすることがなかった」ので早く結婚しようと思い、避妊せず妊娠を希望したと答えています。

Hさん (子ども)できてみたかった。早く結婚して、私は早く結婚したかったし。

Kさん できたらこっちのもんや一、言うてたもんな。

Hさん 別に何もすることなかったし、結婚しよ一思っつて。

Dさんは、排卵検査薬を購入し排卵日に合わせて性行為をし、計画的に妊娠していました。Dさんは小学校の時から「お嫁さんになりたい」と言い、周囲の人々や親に結婚を伝えても、「もう結婚したん？」という反応ではなく、「夢がかなって良かったね」と言われるそうです。

筆者 もう、じゃあ、妊娠されたって分かった時は、やった！って感じ？

Dさん うん。計画通り！

筆者 検査薬とか買ったりして？

Dさん うん。やったかな。検査薬とあと、排卵日の検査できるやつ。排卵を狙ったから。一発でできた。

〈子どもが欲しかった〉

Bさんは妊娠時、中学を卒業しラーメン店でアルバイトをしていましたが、3~4ヵ月で退職して、その後は家にいる毎日でした。夫は旧知の知り合いで、家族と別離し一人暮らしをしていました。Bさん夫婦は、結婚する前から子どもが欲しいと考え、あえて避妊せず子どもを「作った」と答えて

います。

Bさん おろすつて言うのは絶対したくなかつたんで。2人が欲しいから作ったから、責任もつて育てようつていうことで。

〈友人の影響〉

Lさんの周りには子どもを持つ同年代の友達が多かつたため、Lさんは妊娠前から子どもが欲しかつたと言います。妊娠して出産を決意する際も、その友人達が出産への決意に大きな影響を及ぼしていました。出産後も同じ年の子どもを持つ友達がたくさんおり、一緒に遊ぶこともあるそうです。

Lさん 周りが産んではつたから、友達が。友達の子どもとか見ててもすごいかわいしいし、うわ、子ども欲しいな一つて。でもすごい大変やで一つて言われたけど、大変なん承知で。うん。産もうかなつて。周りの影響もあるかもしれん。(略)周りがそういう環境やつたし、たぶん周りが子ども産んでへんかつて、私一人が妊娠してて子ども産むか産まへんかつてなつたら、まあちょっと迷うかもしれへんけど、産んでると思うけど、やっぱり周りの影響も大きかつた。すごい。

〈避妊をしなかつた〉

若年母親は、計画的に妊娠を考えていた人以外、ほとんどの人が避妊していませんでした。避妊していたとしても膈外射精など避妊効果が不確実なものであり、さらにその効果を過剰に期待する傾向が見られました。避妊をしなかつた理由については、

「なにも考えてなかった」、「大丈夫だと思っていた」、「妊娠してもいいと思っていた」と語っています。母親たちは学校で性教育を学んではいましたが、実際の間では生かされなかったようです。

K さん 避妊は、めんどくさくてしてなかった。

H さん 私らの周り、してる人いんの？

このように K さんは、「めんどくさくて」避妊をしていなかったと言い、H さんも、自分の周りで避妊している人など誰もいないかのように認識していました。

④ 《出産への決意》

〈困難は承知で子どもを産みたい〉

妊娠した時は嬉しいと思う反面、戸惑いを感じた人もいました。しかし、戸惑いを感じても、妊娠したら「産むもの」だと考え、中絶することに抵抗を感じています。また中絶することへの恐怖感もあり、出産を選択しています。

筆者 妊娠したって分かった時は、産もうと思いました？

F さん うん。若かったけか知らんけど、おろすってことは考えれんくて、もう、もし困っても、何しても、赤ちゃんおろしたらいけん。なんか、産むもんじゃないですか、おろすって簡単なもんじゃないですよ、どんだけ大変かわからんけど、とにかく産まんやあ、って思っ。

また、妊娠した時期にちょうど進路の選択を迫られた時期にあり、周囲が進路や就

職を考えるのと同様、出産して母親になるという選択をした人もいました。

〈中絶は二度としたくない〉

K さん、J さんは 1 度中絶経験があり、あのような経験は 2 度としたくない、と出産を強く望んでいました。K さんは、高校在学中に当時交際していた恋人との間にできた児を妊娠 5 ヶ月で中絶しています。K さん自身は出産を希望していたのですが、恋人や母親に反対され、中絶せざるを得ませんでした。その時の様子を「産むより痛かった」と語っています。

K さん おろした赤ちゃん、ほんま見たらあかんやあって、おろしたら、お母さんは。でも見してもらって、見るともつとなんかすごい、なんかもう、だって、人間の形になってるし、もう大っきいし。だからその結婚した時に、おろそうかなーって思ったけど、またあんななるのもイヤやしなーと思って。すっごい痛かったんです。おろす時、なんか知らんけど、産むより痛かった。

〈高卒後の進路としての母親〉

G さんは、高校 3 年生の 10 月頃に妊娠が判明し、進路を決めるのが「面倒」になり、子どもを産もうと決意し、出産しています。出産前はアパレル関係のプレスや管理部門への就職を希望していたそうです。

G さん とりあえず、もうおろすのが嫌やあって、怖そう。でなんか、高 3 やって、10 月か 11 月にその妊娠してるのが分かって、進路とかのこと決めなあかんかった時で、なんかもうめんどくさくなって、じゃあ子ども産も

うかなくなって、私は産もうと思った。

(2)【妊娠から出産までの経過】

①《出産を容認する周囲の人々》

〈父親になることを決意する夫〉

母親が出産することをすぐに決意していたのに対し、計画出産を考えていた人以外は、夫の反応は様々でした。妊娠を喜び、すぐに出産の準備を整えた夫もいれば、「嬉しそうじゃなかった」など戸惑いを感じる夫、また(妻には)無理だと中絶を勧めたり、中絶可能な日の直前まで悩んだ夫もいます。しかし最終的には全員が妻の希望に応え、妊娠を継続し父親になることを決意しています。一度は中絶を考えた夫も、本人や妻や子どもの将来を考え熟慮した結果、妊娠の継続を選択しています。

Eさん 段々段々病院代とか、出産費用どうしようとか言う話になってきたら、もう現実が見えてきて、初めダンナさんおろそうって。5ヵ月でおろせって言われた。もうほんまに、自信がないからって(略)。じゃあもうおろすわーって、病院も決めて明日が手術ってなった時に、なんか、目先のことばっか考えて、自分が遊ばれへんっていうのばっか考えて、(夫は)おろせって言ったけど、ほんまにおろしていいんかなって思っ。手術の当日にいきなりやっぱなしって。やっぱ産んでくれて。

また、夫自身の育ってきた環境が複雑であったことから、子どもに父親としてどう関わって良いかわからず、親になることに不安を持った夫もいました。

〈出産を後押しする家族〉

妊娠を知った家族の反応は様々ですが、妊娠前に結婚していた人以外は、すぐに出産を認めた家族は少ないです。しかし、家族の中でも出産を賛成してくれた人がいて、その人が他の家族を説得したりなど、家族の中で本人の決意を支えてくれた人がいることが多いです。妻方の父親は断固出産に反対していたり、また出産に賛成し反対する母親を逆に説得したり、全く意見を言わなかったりなど、対応には個別性が高くみられます。

妻方の母親は、妊娠に驚き中絶を勧めたり、暗に中絶をほのめかすような示唆をしたり、母親として出産の厳しさを教えたり、これからどうしたいのか前向きに話を進めるなどの対応をしていました。しかし、出産することを決めてから、積極的に本人をサポートしているのは妻方の母親であることが多いです。

夫方の両親は、出産に反対しないことが多いです。妻方の両親に出産するよう説得した夫方の母親もいます。Cさんの夫方の母親は、妊娠が分かった時の思いをこう語っています。

CMさん 子ども達は今から楽しまなきゃいけないっていう、親としてのあれはあつたけど、親が犠牲になってもいい、育児に協力しよう。そうでなきゃできないでしょ。

夫方の両親の場合、施設で育った、また今回の結婚以前に婚姻歴がある等の理由で親との関係が浅かった人もいます。妊娠時の家族の反応については、個別性が高く見られました。

〈学校側の配慮と支援〉

妊娠時、在学中だった2人は教師に妊娠した事を告げ、その後の経過を教師がフォローしています。学校に伝えた人については、始業式で校長から全校生徒に伝えたりなど、妊娠を教員だけでなく学校全体でサポートされていました。一方で一部の教師のみに伝え、学校に内密にしていた人については、体育などの授業も休まず参加していました。

② 《マイナートラブルの発生》

妊娠中の異常については、貧血があった人が最も多かったです。その他蛋白尿、尿糖などがありました。事情があり実家を離れ夫と2人で暮らしていたFさんは、妊娠9ヵ月ごろに祖母に妊娠したことを伝えても、喜んでもらえなかったそうです。Fさんは、故郷から離れ知り合いもおらず、夫が不在がちなこともあり、自分は一人ぼっちだと感じ、精神的に不安定になった時期もあったと言います。

Fさん なんか一番悲しかったって考えたのは、子ども産んだら誰が祝ってくれるんだろうと思って。誰かが、なんか、祝って欲しくて、子ども産まれたのを。でもみんな喜んでないし、Fは知り合いおらんし、誰も、親身になって喜んでくれる人おらんあ、って思ったら悲しくなってきたね。旦那も仕事でおらんしなんて思って、したら淋しくなってきた。もうどうしよう、ぼーっと、もうなんか、一人ぼっちみたいな感じになってね。

③ 《出産を重大事とは考えない》

出産時の状況では、体重2500g以下の低出生体重児が4人、正規出生体重児が7名、在胎週数が36週以前の早期産であった人が2人、正規産であった人が9人でした。また、産後の子どもの経過としては、低体重であったために保育器に入ったり、心疾患のため出生後すぐ手術した人もいました。出産時に病院に行く際も、一人でタクシーに乗った、自転車で行ったなど、出産という大きな出来事にも、他人の手を借りずに母親一人で対処しようとしています。分娩経過については陣痛が3~4日続いた人もいますが、全体的には安産だった人が多いです。

筆者 帝王切開は大変じゃなかったですか？

Jさん 全然大変じゃない。ほんとケロっとしてたんだよね。初めだけだよ。終わってすぐ。歩くまでは痛かったんだけど、歩いたらもう何てことない。

また、治療が必要な合併症があっても、経済的理由から薬を買うことができずにいた人もいましたが、周囲の勧めにより薬を買い服薬し、症状を改善させていました。

(3) 【出産後の経過】

① 《家族の転機》

〈子どもを迎えるための家族の変化〉

出産は、家族や周囲の人々にも影響を与えます。夫については、ギャンブルに行かなくなった、外泊を全くしなくなった、などの変化が挙げられました。要介護認定を受けている祖母と同居しているLさんは、

子どもが産まれてから祖母が食欲旺盛になったと言います。

〈入籍できない父と母〉

夫が18歳に満たないために、出産しても入籍できないケースも見られました。夫が17歳の時に出産したCさんは、夫が18歳になった際に入籍すると言います。

〈離婚後の元夫との関係〉

出産後に離婚し、新しい人生を歩んでいる母親もいます。少し距離を置くことで、元夫の付き合い方も変化しているようで、「別れてからのほうが仲がいいかもしれない」という語りもありました。

(次号へ続く)